

おてんばシスターの

カテドラル・ブレイク

著者・ろっめん

体験版 1



くすくす

よういぞ



シスター・チェルシー・クロニクル  
好物:美少女  
レズビアン  
フェイクでイケメン彼氏募集

# おてんばシスターのカテドラル・ブレイク—— 1

著者・ろつきゆん

『こんにちは、ヒロインです。』

いらしてくれた諸侯な皆様。

この世界はエクソシストしてて、ホラーだ。

って、途中でおもわれるかもしれませんが……

ただのコメディです。

怖いもん見たさの方、ごめんなさい。

それでは私が実際に体験してきた、こわ〜いお話を始めましょう。

まずは、第一話にして、第0話。

その出だしは、こう始まるのです。

【——お約束展開でもいいから、人が見たら痒い人生を歩んでね——（汚っさんの声）】

それは子供の頃、私の先生から貰った御言葉です。

え、意味が判らない？

……うん、私も最初はそうでした。

——だいち痒いってなに？

——わからないから！

でもそれを抱いた思索の日々は、周囲の雑多な事象に好奇心を向けさせ、まさに経験。

もしくは指針。

新たな人生観に繋がったのです。

きっと先生は模索する事で色々学べと。  
そう言いたかったんじゃないかな。

……考えすぎかもしれないけど。

さて、私は何なのか。

誰なのか。

どういう仕事をしているのか。

説明始めます。

本当は私の語りの中でそれらを混ぜるのが正しいのですが。  
どれが正しくどれがおかしいなんて決まってないので。

先に！

出来る限り簡潔！

でも長くなったらごめん。

頑張る。

——えっと、旅行者ですっげ集まる私の住処は、

まあ、カトリックの聖地。

イタリアの中にある、

Status Civitatis Vaticanaeに在住。

はい。ヴァチカン市内国内のデケー宮殿の中と、イタリア郊外にお屋敷をもらっています。

メイドの数は……500人。

あ、わりと真面目に。

自分たちからなりたいたいと言ってきたので、無償奉仕させてます。

さて、そっちはおいおいバラすとして。

まずはこっち。

ヴァチカンの宮殿の一室を貰ってます！

決行贅沢です。

資金面もある。

色々エクソシストもこなしてる。

馬鹿もやってる。

いずれにしろ奉仕活動の一環でヴァチカンだけに留まらずイタリアに出張。  
この設備というか、

霊廟というか、

まあイタリア内三大枢機卿のお膝元にあるカテドラル。

例えばミラノの大聖堂カテドラル・ドォーモとか、有名どころで観光ガイドを奉仕活動として頑張ってます。

ちなみになんでそんな出張するかっていうと――

「本屋が近くにあるねん」

――ジャポンのDOUJINSHI・YURI売ってるねん！

まあ、それもあるって観光する時は、わざと皆に晦幻の術で絶対強制美少女にみえるようにして――お駄賃とか飴ちゃんもらって小遣い稼ぎ！　そしてエロB――げふ――同人誌買うねん。

しかも同時にシスター職で、さらに界限では現時代最強と呼ばれてる名うてのエクソシスト（悪魔祓い）もやってるので世界レベルで呼ばれます。

そんで悪魔の胸倉掴んで張りて数発。

そのままタコ殴りにしたあとケツを蹴飛ばしてゲヘナにたたき返してます。

やりたくない面倒仕事ですが、困っている人を救う為の主への奉仕は大切な事。だからなるべく敬虔アピで教会の聖堂でキルレ・イルレイソン――なのに、私のこの時の姿に、何故か野郎どもは二十歳のシスター様だ！

とかいいやがって――

失礼じゃね？

だから、ナンパしに来た奴には、そんな【婆】になった覚えはねえ！

と、刹那で背後取って相手ノーガード状態からの、

ほぼ時間停止、

異国最強殺害術ムエの膝蹴りで、

二度とヴィッチ年代の女ども！ハタチ！――と、一緒にするな！

私は永遠ヴァージンだ！

と、破碎させます。

あれを。

だって私は終生誓願し終わってから！

なので功績多く、地位ももらってますが。

解りにくいので簡略的に主席司祭より上——の特殊シスター扱いです。

そろそろ本題いかないと、なげーな。

最後に一つ。

観光ガイド主体の私の副業100%

悪魔だの他の神を殺すシスターですが。

これだけは知っておいてほしい。

好きであっちこっち行ってるんじゃない。

できるならここで昼寝してたい。

でも他の、普段シスターにえぼりちらす司祭や助祭や神父らのエクソシストは、被験者とりつかれたまま殺害されて事案。

もしくは司祭どもが逆に憑依されて、

悪堕ちおっさん——事案。

いや、あれが奴らの真実の姿なんだよ。

下手くそエクソシストめ。

失敗大すぎ。

私の方が成功率高め、というか100%。

基本ギャグで行く世界ですが、この時だけ、真顔です。

ヤバイ敵奴多いから。

でも一番やばいのは私かもしれません。

私記憶すつとんでるから、年齢知らないんですよ。

見た人によつては5歳だの二十歳だのと。

実年齢も知りません。

そんな私が美少女モードに強制的に見える晦幻の術で観光案内をすると誰もが人生観変わって、「オーベリベリ、キュート、キュート！」と、お小遣いをもらってます。

さて、ここから

## 【序章】

といきましょう。

人生観。

人生観って、私は本とかによって変わる物だと思うのです。

例えば私の本棚から抜粋すれば――

そこには恋話<sup>こいばな</sup>漫画！

俗にいう乙女系。（ジャポンDOUJINSI・YURI）

なので時々ジャポンの【乙女系の漫画】買うそぶりで、シスター服のまま、レディコミ・ジャポンを購入してきます。

いそいそ、と。

そしたらあの本屋……

通報入れやがった……

教会に！

速攻、監視カメラチェック。

カテドラル出るとき、てぶら！

戻ってきたら本屋の紙袋持ち！

その日にシスターで本屋言ったやついない！

で、大司教、司教、司祭（神父のこと）助祭（お手伝い）全員暇だからあつまりやがって大説教大会5時間――いや、これも長くなるから飛ばすね。

で、

本は素晴らしいと思います。

ジャポンの漫画文化も。

その中で真面目な本がありまして、あたしの聖書レベル。大好きな冒険物語なのですが、人生観が綴られた素敵な冒険一物語だと思っています。

タイトル――ザ・野獣王（ビーストキングと読む！）なんてのがあるのです。

著者であり本物の遺跡探検家、考古学者より先に遺跡の秘宝をダッシュするロディマス・サークの自叙伝。



紅海に沈んでいる精緻な寸法で前後左右がまったく同じに造られた計画都市。

船や飛行機で羅針盤やら計器が狂っておつこたり沈んだりのバミューダ海域の謎の大ピラミッドでの冒険。

ラスボスの手先を相手に、必ず決め台詞は――

『そんなに大将が俺にあってえんなら、俺からそっちにつつこんでやんよ!』

そう彼は残して敵陣へ!

敵陣崩壊させたらさらに難解クエスト求めて、秘境だの。

危険紛争地域の遺跡だの。

バミューダだの。

エジプトピラミッドよりドデカイ海底ピラミッドへ侵入。

海底ならではの沈没アタックトラップ発動しても、

水泳スキル100のチート持ちには問題がないらしい。

財宝持って帰還します。

で、この書物をしたためたんだって!

いまじゃ映画化。

世界中で大ヒットかましています。

配役が渋いおっさんなんだけど、

なんというか本物感がなくて、

やはり私は映画派ではなく本派だと気づいた。

そこで、このお話の主軸を彼は本で、映画で記してるの。

『戦い、戦う、いくさの世界! 勝利すれば文明は繁栄。巻ければ国が歴史から抹消。でも、消えるのは人間の王国や文明だけではない。』

信仰。

その裏には、必ずその地で崇められた神々が闇へ葬られ、

信仰も葬られればその地の神は侵略者の信仰する神の方が強いと叫び驕り狂乱の果てに本来の神々は名前を穢され、悪魔にされ、敗戦国の教会や王が、侵略者の神に水桶改宗しろ! アタックくらって、泣き叫んで認めます言えば!

それらは侵略者の神の名において許され天使扱いにされてしまう。

つまり恭順しないで反逆心だせば、神は悪魔や魔王と呼ばれてしまう。悲哀はいまでも遺跡の中に色濃く残っている。

悪魔とされる神。

だからこそ私は埋もれた信仰と共に、古き神々をこの手で救いたい』

彼は失われた聖典を求めるガチムチのおじ様冒険家！

悪漢やら強大な組織と麻薬カルテルに巨大マフィア。

聖域破壊で襲い来る暗殺集団を鉛筆一つで皆殺し！

ダンジョンで！

果ては密林や砂漠で！

例え相手がやべーカルトなイ●ミナデイでも容赦なし！

戦闘を重ね、遺跡の奥地で書物や魔導具<sup>マジックアイテム</sup>を発見する！

そして懐へ！

敵も皆殺しにして去り際のセリフは――

『守る事によって救えるもの、それは君にも、そして守られた者にもあるはずだ！』

私が初めて彼の冒険譚を記した本。

その初版本第一巻を手にとった時。

私の人生も人生観も変わったのかもしれない。

いつかこの人みたいな人と共に悪を倒したい！

カトリックだけど、こっさりないしよで他の神々を助けたい！

本気で彼と悪を駆逐したい！

彼のような表向きは遺跡探検家。

裏では財宝を狙う悪党を誘き出して殲滅する――悪撲滅執行者！

私は彼の本から探究心と冒険心を学び、

好奇から興味を、

興味から指針を求め、

世界へ目を向けるようになっていく。

いつかは、彼のような大冒険を繰り広げたい。

突飛な話じゃなくて良い、

お約束展開で良いから切迫する事態に身を投じたい。

出会いをして、

【恋をして——（ここ重要）】

失われていく何かの為に、

ロディマスと一緒に冒険なんかしちゃいたい！

まあ、最後のは叶う事の無い乙女の夢だとしても、それが古き幼い心の私ゆえに憧れであり、  
今なお求め続けてる——

……私の痒い人生の道標なのです。

さて、もう本編なんですが、なんでこんな話をしたか。

あとで思いっきりひっかかる伏線引いてからです！

よし、

こっから本編です。

【第一章 吹っ飛ぶドアと黒板消しと、岩】

この世には善なる神と、悪しき魔物——悪魔が存在している。

悪魔は時として、

人の弱い心に囁きかけ蜜行に手を染めさせるといふ。

「悪魔は人のすぐ間近に潜んで心の油断、隙間、亀裂を見抜き、そこに入りこむのだ。そうなる前に悪魔を地獄に叩き返せ！」

エクソシスト経験の司祭や司教はエクソシスト課にて必ず教鞭を奮う。

まあ、ほとんど相手は精神すっ飛んじやった統合失調症が多いが。

でも医学で説明できない、首が180度回って、仰向けに倒れたら手足の関節ぐるっとまわって、背中を腹にして、カサカサカサカサ笑顔の180度回転しちゃった憑依者が、跳ねるは走るは天井に昇って小便してくるわ。

まあ、そうなったら精神科関係ないよね。  
うちの出番ですわ。

だから私は、善なる神の御力で、そんな人々を救い出したいと思ひ神の使いとして、その勤めを果たしている……のです——たぶんな（ドヤ顔）

まあ、そんな調子で、悪魔憑き報告なんて本来は一年に数件あるかないか、だったんだけどネットのせいかな、去年50万件きたんだけど——

まさに増加傾向！

悪魔出没報告多発！

派遣エクソシスト数と顕現被験者数多すぎ釣り合わない！

つまり——手に負えない。

さらに、

度重なるエクソシストの失敗。

神父が体も心も乗っ取られただの。

被験者、死んじゃって、

エクソシストの神父が現地の警察に逮捕連打——

命名【拷問執行しやがったから捕まえた】

もう、エクソシストの人数間に合いません！

実話だけどヴァチカンではエクソシスト科で、三週間の講義を受けて、エクソシストを輩出している。

でも三週間の講義で何ができるの？

私も若輩ながら見た目が、人によって年齢が狂わされてる中で、構わず6〜10歳モードで皆に馬鹿にされながらも講義してます！

受けてるじゃなくて、

私が講師してるの！

最終的に、わっはっは、いっつ、じょくw

扱いされるので連中には特別課題でいきなり実践に投入。

本物のヤベーのと対峙してもらって泣きべそかかせてます。

そんなイタリア各地のカテドラルや、

ヴァチカン大聖堂案内ガイド。

そしてエクソシスト課の講師をする見た目が基本6歳児の私ですが！

遂に私の次の冒険が始まろうとしていた。

話の全ては、ここから始まった――

私の生活面を面倒見てくれてたじっちゃんが。

「ごめんねチェルシーちゃん、ケバブとトロピカルジュースをダースで飲んで、南国気分味わってる忙しい時に、ちよっとお話があるの」

ここまでじっちゃんの台詞。

問題は、次、序盤からちよっと長くなるよ。

隣に問題児がいるから。

いや、子供じゃないよ？

見た目二十歳の超綺麗おねーさん。

この年齢不詳のおねーちゃん顔した、おね婆のせいで長くなります！

「――敬虔なる使徒、シスター・チェルシー・クロニクル。

ここはイタリア。

それも地中海方面の温かい紺碧の海が潮騒ならす場所ではなく、

ここ聖域、

ここイタリア中央。

つまりカトリックの聖地――ヴァチカン。

もう一回いいですよ！

ここヴァチカン市国！

ラテン語で、

St a t u s C i v i t a t i s V a t i c a n a e !

ここカトリックの総本山サンピエトロ大聖堂！  
の中庭！

他の司教や助祭、司教にならない値しない神父！

そこで大司教！

色んなのがシスターを超ジロジロみてっから！

それ飲むの止めなさい！

その小汚いメキシコの食い物、捨てなさい。

なんですかその目！

そのジュース奪われる前に飲んじゃえモードで、

最期の一滴まで飲もうとズズズ〜と音立てるのやめなさい！

ダースで買いこんでるんだから一滴くらいいいでしょ残しても！

てかズズズ早くやめ！——てか、この御方のお話を聞きなさい！

見た目チビシスター！」

「もう、うっさいなこの駄目天使！」

——で、じつちやまと受付天使から使命をもらって私は旅に出たのです。

はい、まあ、ここらはそのうち話すけど、

ちよつと事情があるんですよ。

ではここより大冒険。

可愛いチョロイン探しが私の本当の目的。

あとはイケメンがどうしても必要。

そんな野望を持って私は異国ブルガリアへ旅だった。

他の【仲間？】四人と別の国へ。

\*\*\*\*\*

「申し訳ありません神父グレゴリー、わざわざお手を煩わせる事態になってしまいました。まさかこんな身近に事件が起きてるなんて……」

闇の帳が迫る鬱蒼とした木々の中、

一件の教会というには憚られる廃墟がありました。

装飾や権威の象徴さえ見当たらない石造りでこじんまりとした建造物。

侵入者を遮るのか招くのか、戸惑わせるような傾きかけた錆びついた格子扉。

そしてその門前に佇むのは、神父服からでもはつきり解る、いかつい筋肉粒々のボディが、神父の衣服をひきちぎらんばかりに盛り上がっている。そんなマッチョ神父と、隣に佇むのは  
齡8〜12歳？ と、よく尋ねられる見目麗しき極超絶美少女のシスターがいる。着崩れも無い  
黒の修道服と聖帽<sup>ヴェール</sup>に身を包む敬虔な姿はまさに理想のシスター。







仕えてくれるシスターに、神ですら見とれるだろう美貌。

大きな瞳はコバルトブルー。小さな鼻頭からすらりと柳眉に向かうなだから鼻筋は愛らしい稜線を描いてチャーミング。

頭に被っている聖帽ヴェールが風に靡けば黄金に輝く金髪と、長い金の柳眉が現れて鮮やかな碧眼が手にしたランタンの灯りを写して輝きを露わにする。

ぷくりとした桜色の唇が、宛がわれた掌から覗くと、それだけで場は華やかだ。って、いい加減描写が面倒くさくなってきた！

あ——うん、つまりすごい美少女シスターがいるって事！

つまりつまり私のこと！

（え、何か文句ある？）

名前はチェルシー・クロニクルって言うの。

この神父さん家に居候してる十——えふ、実は六歳くらいの乙女で、魔祓エクソシストいのシスターやっています。

他の雑多なエクソシストな連中と一緒にしないでね、悪魔憑依被験者からの解放回数は星の数。

失敗なし！

イケメンの拉致だって失敗無し！

おおっと、失礼、イケメンのデートの誘いの確率も失敗無し！

凄いでしょ？

もうね、バリバリバリって、体に電流が走ったの！  
これが恋か！　ってね。

だから悪魔祓い頑張った！

イケメン被験者は絶対に助けた！

そしてわざと多額の報酬要求。

払えない時は、あたしと、一緒に、『映画でもみて喫茶店で紅茶しお？』って、思いっきり勇気を出して、いったった！

ちなみに私はラベンダーかカモミール派。

とまで会話を進めて、後日デート日に待ち合わせ現地に行ったら、朝9時に待ち合わせ。でも来ないの。何故か。

だから、ずっと待った。

ずっとずっと待った。

なにかあったのかな？

調べに行きたいけど行き違いになったら、彼も困るだろうから、もう少しまとう、もう少しまとう——で、夜21時になってもきやしない。

その日は雪降ってたので、街路灯の下でまちあわせだから、もしも探しに歩いたら行き違いになる——その可能性が怖くて、ずっと待った。

必死に寒い我慢して、まって、あれれ？ 朝の9時集合が夜の9時集合と間違えちゃったのかな？

スマホ？

ねーよ——

とりあえずもう1時間待ってみよう。

うん、頭にサンタクロスでもここまで雪を積もらせないだろうってくらい待ったけど、助けたイケメンきつと来るさ。

まって、まって、待ち続けて、22時の鐘が鐘楼から鳴った——でも、誰も来やしなくて……そろそろ眠いよばとらSSY——って、感じだったけど。

空から降り続く雪をみてたら。

なんか目頭が熱いの。

とっても熱いの。

大丈夫、絶対来る。

来るよ。

来る者でしょ？

イケメンって、女好きの変態ばかりだから、この見た目美少女の私にめろめろになるでしょ！——なのに、なんで来ないの!?

と、一気に感情が吹き出す——どころか、鎮静化して。

なんか、既に私の瞳に輝きはなかった。

ただただ雪を降らす曇天の夜空を見続けて、そしたら——天使のラドゥエリエルが降りてきた。

そつと傘を出して、何も言わず私の隣に。

そのまま翼を器用に動かし私の頭の雪を優しく落としてくれる。

そのまま10分。

互い何も言わず。

でも、根負けしたのは私だった。

もう、精神なんかとくにボツキリ折れていたからだ。

「天使は、神が三体しかつくってない」

少し間があつてから——

「そうですね」

——そんな答えが返って来た。

「たくさん増えてるのは、ローマの糞支配者気取りの十字軍とかいう神の名前を利用した殺戮集団が原因。侵略した国家都市の、逆らった国の者は悪魔崇拜として、すぐに降伏して全面的にローマの糞つたれどもに従ったら、侵略された国の崇拜してた神おが天使にしてやった、喜べ！」と、当時の大司祭どもが籠に揺られてやってきて、そんな事ほざいた——だったよな」

「そうですね」

「お前も？」

また、少し間。

でも答えは返って来た。

「はい。当時は地母神として崇められてました。私、実はえらかったんですよ」

「……」

「……」

互い止まる会話。

でも、チエルシーがんばった。

「天使は、翼、生えてない！ わっただけ！ ルネサンス時代に宗教絵画に天使を神秘性、美德の観念、畏怖と畏敬の念を抱かせ、当時の教会の強欲でぶっ腹の枢機卿や大司祭が、白い鳩の翼をイメージして造らせた物で……」

「そうですよ。でも、この翼は本物です。他の天使の方々はともかく、私はもともと地母神時代から翼があったものですから」

「そか……ぐす」

ついに、厭味ったらしくつつぱねる会話も、限界だった。

私の頬に幾つも雫が垂れ始め――

ラドは、そのまま翼で人の肩をだきしめやがって――

「帰りましょう」

凄く強めにそう言ってきた。

だから、何故か余計雫がながれてて、絶対に声や鳴咽は、出すものか！ と、ふんばって

「泣いてない」

「はい」

「絶対に、泣いてなんか、ない」

私が言えたのは、そこまでだ。

「知ってますよ。だからこそ、帰りましょう。貴女のところにこない男が審美眼のない、不徳心得者だっただけ……嫌だったら嫌で、ここに来てはつきり告げるのが男でしょう？ それすらせずに貴女の見ただ目でめちゃんと理解して、断るなら断る！ それが真の男。貴女が助けたあの男は、その価値すらなかった糞つたれです。サノバビッチです！」

私は、もう、頷くしか、できなかった。

涙、とまんないんだよ――

「帰りにハンバーガー買いましょう。温かいコーヒー付きです」

有無を言わさぬ迫力ある声で、はつきり言う。

初めてラドウエリエルが、怒ってるのを理解した。

でも――

「あ、あのね。お金、これ、いつかつかうデート資金だから……とっときたくって……」

「ここに来る前、じっちゃまさんが、他の方々から見られないように、私にそっと握らせてく

れました。お金」

「！」

「そして、何か食べさせてから帰宅させて、と、少しお金をいただいております。大丈夫、国庫資金ではなく、じつちやまさまのポケットマネーだそうです」

「ぐす……ひう……ぐす……」

私はこの日、このド変態天使と普段から馬鹿にしてた小憎たらしい元女神に何も言えず、ただ傘の下。

更に翼で頭から肩に雪がかからないよう、頭上にのばしてもらって……

泣きながら購入したハンバーガー二つと、ホットコーヒー、シロップ三個入りにしてお店で飲んだ。食べた。

ラドも何も言わず、一緒にハンバーガーとホットコーヒーブラックで飲んで、食べた。そして一緒に帰った。

この日が、初めてイケメンに勇気を出して、助けたどきくさで誘ったデートで、無言で逃げられふられた瞬間だった。

そして、後で調べた事だけど、彼の家に行ってみたら売り屋になっていた。

マン・●ブ・スティールのスーパーマンの育ての母か、お前は！

いずれにしろ家族そろっどつかいたらしい。

どっか行ったというのは、住基ネットワークで調べたら、私が追跡できないようにだろう。ストーカー保護法を市役所に登録して、家族全員で引っ越してた。引っ越し理由は悪魔がいたから、そしたら悪魔を倒した別の悪魔が幼女の格好のシスターの物まね恰好で、魂喰ってやるから朝の9時に待ち合せな！と言われたので怖いから別の国にひっこします。

だ、そうです……と、市役所の女職員……が、たぶん気づいたのだろう。目の前の幼女のシ

スター悪魔と言った存在が誰を指すのか。

だから、不憫そうに言葉を選びながら、教えてくれた。  
最期去り際に、心落ち込まないでね……

と、言われて、また泣きそうだった。

これが一回目の金髪碧眼イケメンを誘って逃げられた初・たい・けん！だ！

そんな過去だ。

つまり、経験豊富なのだ。

今更邪教の館なんか怖くない！

それと——【おおっと、失礼、イケメンのデートの誘いの確率も失敗無し！】発言しちゃったけど、嘘です。以上！

「気を落とさないで下さいシスター。これも主の御心の導きなのでしょう」

何の話が一瞬わかんなかったけど、思い出した。

色々調べられなかったのだ、この見るからにヤベー屋敷という名の邪教の館。

きっと三体くらい悪魔を集めて、悪魔合体してるに違いない。

役に立たない外道スライムでも造っちまえ！

『我は外道、スライム。今後ともヨロシク』

昔、ゲームセンターで、プリクラが出た時代。一般カップルよりも、ヤンキーカップルが多かった。それで、長蛇の列ができて、何度も『おい、フィルムきれたってよ！ でねーぞ！』と、怒鳴られた。チンピラに。なので鍵あけて、中のフィルムセットし直して用紙いれて鍵閉め。



そして私は笑いそうになった。

だって、プリクラで命令してるのは株式会社アトラ●の女神●生の雪の悪魔ジャック・フ●ストが命令してるのだ。人間に。

そして操られるようにプリクラ。

当時は模様替えだの、おめめをきらきらだの、そういう機能はないけれど、君たちのお父さんお母さんは、悪魔の命令でプリクラしてたんですよっ☆

さてさて、神父さんとの会話に戻しましょう。

脱線しすぎ。

神父さんが言った【気を落とさないで下さいシスター。これも主の御心の導きなのでしょ】だけど、

隣に佇む神父様は、真剣に邪教の館を見つめている。

何か魔術的、呪術的な何かが襲ってくる。

その可能性を危惧してるのだ。

こんな山の中の奥地の森の中、いきなり怪しげな館があれば、時間も夜になってきていれば警戒どころか、正直で恐ろしいだろう。

このマッチョ神父様は、私の家主でもあるグレゴリー・G・セラフィさん。神父服からはみ出しそうな筋肉美も素敵な大男で、どう鼻屑に見ても四十過ぎのおじ様だが。赴任時に聞いた話しでは嘘か本当か三十後半と言いつつ切った。

そんな神父様と一緒にだが、危険な場所に踏み込んでいる事には変わりがない。なので、さっそく私は『解紋』と呼ばれる言葉を口にする。

つまりこの時点で戦闘開始！

「我が前方に一神の癒し――」

「解紋ですか!？」

さすがの神父様も驚いた。

これを使えるエクソシストは地球に5人しかいないからだ。

さすがの枢機卿たち聖人と呼ばれた者にも不可能だ。

「我が前方に<sup>ラファエル</sup>一神の癒し<sup>”</sup>——我が後方に<sup>ガブリエル</sup>一神は我が力<sup>”</sup>——我が右手に<sup>ミカエル</sup>一神の如き者は誰か<sup>ル</sup>」  
「我が左手に<sup>ファヌエル</sup>神の顔<sup>”</sup>——聖なるかな、我が神の御力よ。我が印を解き放て！」

これは召喚のワード。

私の左眼に封印されてる天使を呼び覚ます物なのだ。

そして解紋が終わると、左手のレースグローブが抵抗なく外れ、私の左腕に浮かぶ三位一体の紋様が輝き、網膜にある聖紋に力を与える。

さあ、今までのおバカやってた時と違って、ちょっとチェルシーちゃん、本気だしちゃうよ。  
。

「——<sup>メタトロニオス</sup>術式聖法陣より、破壊の二天使ザピエル！ サムキエル！ ——召喚！」

叫ぶ私の網膜から、空間に幾何学模様の魔法陣が浮かびあがる。

その中から、ずるゝつと、堕ちるように這い出てきた者たちがいる。

ローブを纏い白き翼を生やす二体の天使が召喚された。

手には炎剣が握られ、抗う者を焼き尽くそうとしているようだ。

この二天使、実はかなりヤバイ天使。

その眼差しで街ごとぶっ壊したで有名な破壊の天使たちなのです。

天使はさっそく頭上へ飛び上がっていく。

私たちの援護に回ってくれたのだ。

館から悪魔かなんかでてきたら、目からビームで、巨神兵状態。

全て焼き尽くす焦土と化すだろう。

これで防備は完璧！

「破壊の二天使ですか、初めて見ましたよ……」

十字をきる神父様の感嘆の声を聞きつつ、輝く左腕ヘレースグローブを嵌め直す。

「あの二人はいざという時の保険です。なにかあれば、ドカンです」

真顔で黒の聖帽<sup>ビレタ</sup>を被り直す神父様。

聖書には見えない大判サイズの聖書を右手に抱き、左手には大きい棍棒<sup>ヘビームイス</sup>のような木造十字が握られている。

つまり私たち。今回は本当に戦闘モード。

戦いに来てるのです！

紅光も徐々に薄れて森に囲まれたこの地域一帯は、信じられないくらいの闇に染まる。そこにランタンが門扉の脇に掲げられた教会はシチュも完璧です。

「しかし、これは……どういう事でしょうか」

「ね、ね、チェルシー嘘言わないでしょ？」

ここはブルガリア——

リアデイス村郊外の森の中。

荒れた中庭に転がるのは白木造りでクロスされる十字架のオブジェ。

「話を聞いた時には耳を疑いましたが」

つまりカトリック教会のシンボル。

でも、それが根元から碎かれ無数に逆さで埋没していると、ちよつとヤバイ。

これを中心に逆五芒星でも書かれたら、完全アウト！

悪魔崇拝者の証しとなるのだ。

「この意味するところは神父様もご存知ですよね」

「……あまり考えたくはないですけど……知ってます」

このオブジェ、実は二種類の意味があるの。

逆さまのままなら、実は悪魔信仰にならない。ジーザス・クライストが復活したあと、第一の使徒、ピーターは、クライストの教えを伝えるに放浪の旅にでるが、ほとんどの使徒と同じ、その国のトップの命令で捕まり、自分たちの神の信仰を乱す悪魔とされて、処刑が定石。

ただ、ピーターは、当時はやっていた十字磔を、あまりにもつたいないと、ジーザス・クライスト——ジャポンでは何故かイエス・キリストと呼ばれている。読み方間違ってますよ。

なので、ピーターは自分の師であるクライストと同じ死に方は、あまりに申し訳ない——十字を逆さまにもらって、処刑された。

つまり、この十字架の意味の一つは聖ペトロ十字——正確には聖ピーターロザリオになるんだけど、いずれにしろ聖ペトロ十字と呼ばれる由緒たる物。

でも——

これだけあからさまだと意味合いがもう一つのほうになるんだよね。

「これ、絶対、被験者は悪魔に憑かれてますよ」

「反カトリック……邪教、悪魔主義や悪魔崇拝者のシンボルですね。逆五芒星はないですけど、ここまでくると疑うべきものはないでしょう。これは館、いえ、いずれかの神を信仰する教会でしょうから、こちらの神父殿から事情を伺うべきなのでしょうが。でも何で司教区から連絡が来ないのでしょうか。これだけの屋根にあがって、へしおつてもつてきたものでしょうか……十字架の数枯らしてカトリックの教会から被害。だと思われます。なのに、なぜ真っ先に私のところに連絡が来ないのか……あってもいいはずなのに……あつれえ」

思案顔の神父が言葉を濁す。

逆さ十字は根もとから折られ、

どうみてもどこかの教会から盗まれたような十字架の残骸だ。

近隣でこれだけの被害が勃発してんなら、

こちらの地方を統括するヴァルナ司教区から、神父様が受け持つリアデイス村小教区へ通常は報告があるのが普通。

でも来てない――

何故か――

聞いた話じゃ過去に何か上役に正義の裁きやらでもヤツタ事があるらしい神父様。

ぞんざいに扱われてんのだろう。

「神父！　あまり考えないで、ハゲますよ」

「失敬な。私の髪はふさふさです」

「ならば踏み込みましょう神父！　人気のない森の中、怪しい廃墟に異教徒集合同所！　これ、もう十分怪しいです！　とうかモサモサしてたら、ホラー映画みたいに背後から集団で襲われ、私みたいな弱い美少女は集団で凌辱！　神父様は、バラバラに切り刻まれて、牢屋監禁された私の食事に――って、キモ！　コワ！」

「いや、そんな輩が来たら銃で撃とうがバスターカぶっぱなそうが、私が拳で特攻します！　だから変な想像しないでください。それにチェルシーさんなら、主と子と聖霊の加護持ち。やろうと思えば時間停止くらいできるんじゃないですか！　普通のシスター解紋できませんよ!?　聖人クラスじゃないと不可能ですって！」

――ち、色々知ってやがる。

私のか弱い美少女宣伝効果、後日効果発現！　を期待したのに、一撃で粉碎されたわ！

でもとにかくだ。

「解りました神父様！　突っ込みます！」

私は言うだけ言うと拳を握り、神父がこれ以上悩む前に錆びた鉄格子を蹴り飛ばした。

「ちょおおお、お、お待ちなさいシスター!? 詳しい状況の把握も出来ていないのに、というかさっきの話聞いてないですね!? 悪戯に飛び込んだでは——」

「そんな悠長な事をしてたら日が暮れます! もう暮れましたが! いずれにしろ主にあだ名す輩を放置してどうすんですか! かつてモーゼもいました、ヤバイの見つけたら問答無用。それが気に食わない事柄なら、例えば天使が相手でも、主と、子と、聖霊のなにおいて、ア——んパーンチ! からの腹パン!」

毅然と言い切り凄然たる逆さ十字が乱雑に並ぶやっべー中庭を突っ走る。

肘まで覆うホワイトレースの手袋で石を拾い、古びた両扉に駆け寄った。

かつては精緻な装飾だったのだろう古扉や外壁も、邪教の一派が根城にしては威光もへったくれもありやしない。

だから玄関先の両扉も力の限り蹴り飛ばす。

吹っ飛ぶ蝶番、跳ねる木製扉一枚!

乱入する私!

しかし!

何かミスった!

視界に飛来するのは赤銅色の何か——

それでも私は頑張っ——

「リアデイス教会のモンだ、神妙にしやがれ邪教——とおおおっばお!」

——美少女の口腔から唾液と胃液が噴き出した。

「シ、シスター・チェルシイイイ——!!」

響く神父の絶叫が闇夜の森に木霊する。

え、何が起こったかって？

腹のど真ん中に巨大な丸太が刺さってきたの。

これ、致死レベルの攻撃なんですけど？

まさか悪魔が囁きや不気味演出に頼らず、いきなり人間殺しに来る精神。

こいつは、やべえぜえ……。

とか、言ってる場合じゃないっての！

「ぢぐ……つじよお……間違まちがい《》ない、こいつら教会側の攻勢を予見じでやがった！」

丸太が鳩尾みぞおちどころか内臓満遍なく抉っているのだ。

「……死ぬ、死んじやう神父様、グズつ、私ったら……召されるうう……」

「だ、大丈夫ですよ。まだ召されませんって」

「畜生おおおお！ あいつら破城槌使ってきたあ。戦時中かここは！ それとも私のボディが城塞都市にでも見えたのか、悪魔崇拝のサイコ野郎どもめ——ああ、ダメ、まずい、怖い、怖すぎてお腹が直視できない。マジ涙でそう。きっと色々出ちゃってるう。私、まだ十代前後なのに内臓モロ出しで色々だされちゃって、逝くう。いくう、とかいってますが、別にエッチなジャポネーゼDOUJINに出るようなレイ●物の雌の声的な意味でいK——」

「いいです。ききたくありません」

「……」

「それから大丈夫ですよ。丸太がお腹に当たっただけですって。ちょっと修道服がよれただけ。衝撃はあったでしょうが、死ぬことはありませんよ。ただの防犯用のトラップでしょう。致死性無しレベルでの」

「……えっ、じゃあ……なんとも、ない？」

怖々とおなか触って問うと、神父がコクンと頷いた。

私もそっとお腹を確認。

血飛沫一滴も、なし！

私はそれを確認し、静かに立ち上がり、衣服も確認。  
本当に服がよれただけで大丈夫だった。

なので神父へ頬染め可愛らしく一礼。

吊るされた丸太を——一気呵成に蹴り飛ばす！

支えるロープは寸断され、

丸太は床に跳ねて天井へ、

ついには会衆席の長椅子まで吹っ飛ばした。

そんなお茶目な仕草をアピールした矢先だった!!!

「器物破損で人んちの敷地内に侵入、玄関先をトラップ喰らって、さっさとすっ飛ばされて屋外に消えてなくなればいいのに破城槌喰らってんのに、ふんばって、そのまま床へゲロ塗れ。大絶叫の果ては小聖堂や長椅子破壊って、噂には聞いてたっすけどカトリックってマジ怖いわ」

さほど広くない聖堂に響く心地良いアルト声。

反射的に振り返って、裏拳でもかましたろ思ってたのに、私は思わず驚嘆した。

見てしまったのだ。

とんでもないのを。

つまり——